ドイツ文学研究方法論
―ある日本人研究者をめぐって―

梅　澤　知　之

1　はじめに

2019（令和元）年６月29日中村元保氏が逝去された。大阪大学ドイツ文学会では、同年12月14日［トークプロジェクト：中村先生のお仕事をふりかえる］が開催された。その中で筆者は依頼を受けて「中村先生のシラー研究」を担当した。これをきっかけに、ドイツ文学者中村元保の業績を見直し、その研究と方法論について考えることになった。以下は、その時の発表を基にして、さらに敷衍したものである。敬称は略す。

2　主な仕事

経歴と業績は、別表の通りである。主な仕事は、単著１冊、論文25編、そのうちシラー論文13編、市民劇等18世紀関連10編、その他（現代劇）２編、共訳書５冊である。さらに共同研究がある。その結果が三つのシンポジウムと共編著１冊である。

3　評価のための手がかり

まず共同研究を年代順に列挙する。

①　阪神ドイツ文学会　レッシング生誕250年記念シンポジウム「ドイツ市民劇の成立と展開　その１」[1]
1979（昭和54）年６月24日　親和女子大学
司会　南大路振一、石川實
報告　中村元保、南次郎、青島雅夫

②　阪神ドイツ文学会　レッシング生誕250年記念シンポジウム「ドイツ市民劇の成立と展開　その２」[2]
1979（昭和54）年11月25日　甲南大学平生記念館
司会　南大路振一、中村元保

報告　八亀徳也、神代尚志、深見茂、須賀洋一

③　日本独文学会シンポジウム「シュトルム・ウント・ドラング期の演劇」1980（昭和55）年10月６日　神戸大学[3]

司会　南大路振一、深見茂

報告　八亀徳也、石川實、中村元保、神代尚志

④　ドイツ市民劇の共同研究　1980（昭和55）年11月～1983（昭和58）年７月研究会を26回開催。[4]

⑤　南大路振一・中村元保・石川實・深見茂編　『ドイツ市民劇研究』　三修社　1986（昭和61）年６月

シンポジウムの司会は、常に南大路振一が担当し、石川實、深見茂、中村元保のうちの一人が交代で順番に補佐役を務めている。共同研究集大成としての書物は、この四人が共同で編集している。そして「序論」は、南大路振一が、「あとがき」は中村元保が執筆している。

言うまでもなく共同研究は、この四人を中心に行われていた。

さらに論を進めるために、この四人の生年もしくは生没年を以下に記す。

南大路振一　1923（大正12）年～2017（平成29）年

石川實　　1929（昭和４）年～2021（令和3年）

深見茂　　1934（昭和９）年～

中村元保　　1935（昭和10）年～2019（令和元）年

⑥「シラー研究会」　1986（昭和61）年４月～2001（平成13）年４月からは、「オイフォーリオンの会」と改称。[5]

４　研究の三つの時期

氏の研究業績から見て、次の三つの時期に大別できる。

1）第１期　1958（昭和33）年～1975（昭和50）年

大学院修士課程入学から1975年まであり、この時期は主としてシラー論文を執筆している。

2）第２期　1976（昭和51）年～1986（昭和61）年

本格的にドイツ市民劇研究に取り組んだ時期である。

3）第３期　1986（昭和61）年～2019（令和元）年

懸案であったシラーの共同研究に本格的に着手した。

ここから個別に見ていく。

4-1）第１期　単独でのシラー研究

第二次大戦以前、わが国の知識人の間では、シラーはゲーテに次ぐドイツの大詩人として迎えられていた。それは、ドイツ本国での評価の忠実な模倣であった。十九世紀後半になってようやく近代的統一国家として歩み始めたドイツ帝国で、ゲーテとシラーは精神的支柱として国民文学の古典となる。ゲーテは決して大衆作家とはならず、その受容は、比較的高い教養を持つものに限られていた。一方シラーは根っからの芝居作りの名人であり、大衆の心を捉える勘と技量を持ち合わせ、国民的詩人として祭り上げられる。すなわちシラーは「愛国的自由の詩人」として偶像化される。このためシラー解釈も画一化、おもしろ味に欠けることになる。わが国においても、当然のことながら同様の状況であった。[6]

さて、第二次大戦以後、わが国におけるシラー研究に大きな足跡を残した研究者の一人に石川實がいる。1929（昭和４）年生まれの氏は、旧制中学出身であり、戦前の教養教育と戦後の新制教育の両方を十分に享受した世代の一人である。氏のドイツ文学研究は、ドイツだけではなく、「シラー神像化とは無縁のイギリス、フランス等における研究」[7]も参考にする。ここに十八世紀末という転換期を生きる新たなシラー像が提示されることになる。

中村元保は1935（昭和10）年生まれであり、新制中学出身である。最初から戦後の高等教育を受けた世代である。大阪大学教養部で、ドイツ留学から帰国間もない片山良展氏（大阪大学文学部独文学専攻三代目教授）にドイツ語の手ほどきを受ける。[8]そこを起点にして、ドイツ語のテクストを正確に丁寧にじっくりと読むこと、文献を広く精査すること、思想・社会の歴史的背景を理解すること、これらを意識的に実践した。そして戦後登場したドイツ人の新しい研究に触れる。論文はまことに一つ一つ丁寧に書いている。扱った戯曲を見れば、『群盗』に始まり、『ドン・カルロス』、『たくらみと恋』、次いで『フィエスコの叛乱』である。

戦後ドイツでは、ナチスとの関係を避けるため、意識的に歴史から離れる傾向があり、例えば、ヴォルフガング・カイザー（Wolfgang Kayser）やエーミール・シュタイガー（Emil Staiger）の作品内在的解釈が知られている。

中村も無論この影響は受けて、テクストをじっくりと読み込む作業は十二分に行った上で、さらに作品の背景にも関心を示すようになった。それは氏の『たくらみと恋』に始まる市民劇への関心と結びつく。[9]

実は1960年代に入り、ドイツ本国において、十八世紀のドイツ市民劇研究がにわかに活気を呈することとなる。それは、近代の出発点としての啓蒙主義時代を見直すことが動機として働いていたと考えられる。[10]

こうして中村にもまた市民劇研究への道が開かれることとなる。

４－２）第２期　ドイツ市民劇共同研究、シラー特集の編集

この時期は、共同研究の時期であった。氏は中心メンバーとして積極的に参加する。1979（昭和54）年開催阪神ドイツ文学会「レッシング生誕250年記念シンポジウム、ドイツ市民劇の成立と展開その１、その２」、1980（昭和55）年開催日本独文学会シンポジウム「シュトルム・ウント・ドラング期の演劇」、1980（昭和55）年11月から1983（昭和58）年７月にかけての「ドイツ市民劇の共同研究」である。そしてこれは南大路振一・中村元保・石川實・深見茂編『ドイツ市民劇研究』三修社1986（昭和61）年６月として結実する。

もともと十八世紀ドイツにおける「市民社会」成立事情の解明は、イギリスやフランスと比べ、立ち遅れていた。しかし当時の社会構造とともに市民階層の実態が明らかになるにつれ、市民の「家庭」の実態が以前より明らかになってきた。「家庭」は「家父長」を中心に構成される核家族、つまり「小家族」であり、公的な世界に対する私的な生活領域である。またそこを支配する価値観は、道徳的色彩が強かった。このような状況にあって、「市民劇」やこれに類する作品が、丹念に収集され、その内容があらためて検討されることとなった。こうして「市民劇」研究も新たな様相を呈することになる。[11]

この流れを受けて、阪神地区では、1979（昭和54）年のレッシング生誕250年記念シンポジウムに向けて、南大路振一、石川實、深見茂、中村元保を中心とする共同研究が発足する。中でも南大路振一は、1923（大正12）年生まれ、旧制中学、旧制高校卒業であり、レベルの高い教養教育を受けている。氏は1954（昭和29）年10月から1956年（昭和31）年10月までフンボルト学術財団奨学金による西ドイツ（ゲッティンゲン大学とテュービンゲン大学）留学を経験し、卓越したドイツ語力と粘り強さで会員を引っ張った。また深見茂は、1934（昭和９）年生まれ、旧制中学入学後、２年から新制中学に移行した世代である。旧制の教養教育と新制の戦後教育の両方を受けている。氏もまた西ドイツ留学経験がある。DAAD（ドイツ学術交流会）奨学生として、1962（昭和37）年７月から1964（昭和39）年８月までテュービンゲン大学で学ぶ。氏もまた南大路を補佐した。

この四人の中心メンバーの中で、言うまでもなく南大路が先頭に立ち、他の

三人も共同研究を支えた。研究論集の分担からその大きな役割が見て取れる。南大路は研究史全体の概観と市民劇前史、中村は市民劇の成立の過程、石川は市民劇全盛期とシラー、深見は市民劇の変質と家庭劇への変貌である。[12]

後に論集編集の時、この四人が共同作業を行った。ただし、出版社や各執筆者との諸連絡、四人の編者たちとの調整作業は、つまり編集の実質的取りまとめは、主に中村が担当した。氏の共同研究運営能力、編集能力が秀でていたためである。

なお、研究論集第 3 章「市民悲劇」の成立が、後に『ドイツ市民悲劇成立の研究』（学位論文）[13]としてまとめられたことを記しておく。

この時期、中村はまた、シラー生誕225周年を記念して、日本独文学会編『ドイツ文学』第73号「シラー特集」を編集した。氏を含めて七人の論者による特集であった。まず中村は、巻頭において、「最近の10年間におけるシラー研究 ― 特集にあたって ―」を載せることで、全体の見通しをつける。[14]氏は次のように述べる。この時期、総合的シラー論が見られなくなった。解釈の多様化にその原因がある。統一的シラー像を確立することは、もはや困難になった。ただいくつかの試みはあるとして、紹介に務めている。特集の各論者の見解をまとめてみると、このようなシラー研究の現状がわかる仕組みになっている。ここでも氏の編集能力の高さがうかがえる。

４－３）第３期　十八世紀文学、シラー研究、児童文学、翻訳

この時期は、中村の助教授時代の最後、教授、学部長、学長時代にあたる。特に学内外の仕事に忙殺されていた。

氏は第 2 期において、十八世紀の作品をまず個別に丁寧に扱った。すなわち、発表順にレンツの『ツェルビーン』、ワーグナー『嬰児殺しの女』、クリンガー『シュトゥルム・ウント・ドラング』である。次に第 3 期に入ってゲラート『優しい姉妹』である。氏は卓越した語学力を背景にいつものように緻密にテクストを読み込む。文献を博捜・理解・検討する。さらに「市民劇」共同研究から得られた社会史への目配りがここで見事に融合する。「シュトゥルム・ウント・ドラング期の市民劇における市民批判」[15]である。

当初、感傷主義的特徴を持っていた市民劇は、レッシングの『エミーリア・ガロッティ』において、社会批判的要素が前面に押し出される。すなわち上流階層批判である。しかしシュトゥルム・ウント・ドラング期に入ると、上流階層と市民階層の対立葛藤が主題とはなっているが、体制批判の要素は希薄になる。その代わり上層階層の行動規範のみならず、市民階層そのものの問題性も

明らかになる。[16]中村は、論文の最後で、「シュトゥルム・ウント・ドラング期の市民劇は、階層間の葛藤を描きつつ、市民階層の内部に潜む非人間的なるものを鮮やかに剔出している」[17]と述べる。氏は、この時期の演劇作品を十分に読み込むことにより、具体的に時代の実相を明らかにすることができた。

また中村は、「市民劇」共同研究が一段落したのを機に、1986（昭和61）年４月長い間の懸案であった「シラー研究会」を始める。中村の他に、石川實、深見茂、須賀洋一、神代尚志の諸氏を中心とするものであった。

1993（平成５）年５月13日東京ドイツ文化会館において、日本ゲーテ協会第五回ゲーテ・シンポジウム「ゲーテとシラー」が開催され、中村は「ゲーテとシラー」と題する発表を行い、同時に司会も担当する。発表者は中村を含めて五人であった。[18]このときの発表は、1995（平成７）年『ゲーテ年鑑』第37巻に掲載される。中村は、シンポジウムにあたって、ゲーテとシラーの交友関係について詳述する。[19]当初二人はお互いの違いを強く意識し、反発し合う。ゲーテは自然で純粋な直観により詩人であり、シラーは、直観的精神を汲み取ることにより、思弁的抽象の世界から、詩人へと回帰する。シラーは、ゲーテの存在を強く意識しながら、病を押して仕事を続ける。

> 並外れた存在は、自己完成に向けて自己を高めるために、その督励者として並外れた対照的存在を必要とする。互いの本姓に根ざす対極性が、ゲーテとシラーの場合ほど豊かに、生産的に働いた例はない。[20]

中村は、このようにシンポジウムを始めることで、全体の見通しを見事に示す。

さて、1995（平成７）年８月、中村は文学部長に就任する。「シラー研究会」には以前ほど出席できなくなる。林正則、廣瀬千一両氏を中心に、石川實、深見茂、須賀洋一、神代尚志の諸氏が長老格で出席し、会の運営にあたる。

2001（平成13）年７月、会は、待望の研究論集『仮面と遊戯　―　フリードリヒ・シラーの世界』を刊行する。[21]中村は、『ヴァレンシュタイン』論を寄稿している。[22]これまで主に初期のシラー作品を扱ってきた中村にとって、待望の後期のドラマであった。ただし公的業務が重なり、丁寧にヴァルター・ヒンデラー（Walter Hinderer）を参考にして、作品内在的解釈を行った論文であるが、おそらく氏にとっても論じ切れないところがあったのではなかろうか。

2001（平成13）年４月、シラー論集出版の目処が立ったのを機に、シラー研究会は、「オイフォーリオンの会」と改称された。その研究対象は、シラーのみ

ならず、十八世紀から二十世紀まで幅広く近代ドイツ文学・文化・思想である。運営は、林正則、廣瀬千一を中心に、石川實、深見茂が長老としてサポート役に回り、栗林澄夫、渡邉哲雄、筆者もメンバーとして加わっている。会はその後も中村たちの思いを継いで現在まで続いている。[23]

さて、この時期の中村には、翻訳の仕事がある。

大阪大学定年後、1999（平成11）年梅花女子大に転任し、児童文学を講じることになる。これをきっかけに、2004（平成16）年、渡邊洋子との共訳でダグマル・グレンツの『少女文学』が出版される。[24]また2009（平成21）年、同じく渡邊との共訳書ジークリット・ダム『フリードリヒ・シラーの生涯』も世に出る。[25]いずれも高い語学力に裏付けられた得がたい翻訳である。前者は、文学史の空白を埋める貴重な文献である。また後者は、作家としてのシラーの日々に迫る興味深い記録である。

5　おわりに

中村元保の研究全体をまとめると次のようになる。すでに述べたことだが、ドイツ語のテクストを正確に丁寧にじっくりと読むこと、文献を広く精査すること、思想・社会の歴史的背景を理解すること、これらを意識的に実践した。言い換えるならば、卓越した語学力を背景にした緻密なテクストの読み込み、文献の博捜・理解・検討、さらに歴史的背景への目配りである。

シラー関しては、優れたドイツ語読解力を発揮して、主に作品内在的解釈から出発し、初期の作品を論じた。後期の作品に関しても、『ヴァレンシュタイン』論を執筆する際、十八世紀「市民劇」共同研究から得られた社会史への目配りをしようとしたが、それは果たせなかった。それだけ一層シラーの大きさがわかる。[26]

研究者として、中村のもっとも優れた点は、共同研究をまとめる力、また編集能力である。これは余人の追随を許さない。南大路振一、石川實、深見茂たちとの「市民劇」共同研究の中で培われた。シラーの研究動向、シンポジウムの司会、共同研究の出版がその成果である。

翻訳は、言うまでもなく優れたドイツ語読解力と確かな日本語力のなせる技である。その日本語力がどこから来たのかは、確かめるすべはなかった。ただ能楽や謡に関する関心は、直接伺うことがあった。

筆者は、中村元保の最も脂ののりきった時期にそばにいることが出来た。このことは、人生の幸いである。また病気がちであった晩年の中村を支えていたのは、案外シラーの、病を押して仕事を続ける、という気持ちだったのかもし

れない。

注

1　阪神ドイツ文学会編『ドイツ文学論攷』第21号　1979（昭和54）年　99-109、138ページ。
2　阪神ドイツ文学会編『ドイツ文学論攷』第21号　1979（昭和54）年　111-120ページ。
　阪神ドイツ文学会編『ドイツ文学論攷』第22号　1980（昭和55）年　110ページ。
3　日本独文学会編『ドイツ文学』第66号　1981（昭和56）年　184-188ページ。
4　南大路振一・中村元保・石川實・深見茂編『ドイツ市民劇研究』三修社　1986（昭和61）年　484ページ。
5　梅澤知之「オイフォーリオンの会」ドイツ語学文学振興会編『ひろの』第53号　2013（平成25）年　26-27ページ。
6　石川實『シラーの幽霊劇』国書刊行会　1981（昭和56）年　250-252ページ。
7　前掲書　252ページ。
8　中村元保「片山良展先生を悼む」大阪大学ドイツ文学会編『独文学報』第20号　2004（平成16）年　233ページ。ちなみに中村元保は、大阪大学文学部独文学講座第４代教授であった。
9　中村元保『ドイツ市民悲劇成立の研究』　朝日出版社　1991（平成３）年　325ページ。
10　南大路振一「序論　十八世紀ドイツ「市民劇」管見」南大路振一・中村元保・石川實・深見茂編『ドイツ市民劇研究』三修社　1986（昭和61）年　32ページ。
11　前掲書　32-33ページ。さらに参考になるのは、Karl S. Guthke: *Das deutsche bürgerliche Trauerspiel*, 3.Auflage, Stuttgart: Metzler Verlatg, 1980.
12　南大路振一・中村元保・石川實・深見茂編『ドイツ市民劇研究』三修社　1986（昭和61）年。
13　中村元保『ドイツ市民悲劇成立の研究』朝日出版社　1991（平成３）年。
14　中村元保「最近の10年間におけるシラー研究 ― 特集にあたって ―」　日本独文学会編『ドイツ文学』第73号　1984（昭和59）年　1-11ページ。
15　中村元保「シュトゥルム・ウント・ドラング期の市民劇における市民批判」大阪大学ドイツ文学会編『独文学報』第11号　1995（平成７）年　1-17ページ。
16　中村、前掲論文、1-3ページ。

17　中村、前掲論文、16ページ。
18　「協会事務報告（摘要）」　日本ゲーテ協会編　『ゲーテ年鑑』第36巻 1994（平成６）年　235-236ページ。
19　中村元保　「ゲーテとシラー ― シンポジウムにあたって ― 」　日本ゲーテ協会編　『ゲーテ年鑑』第37巻　1995（平成７）年　19-36ページ。
20　中村、前掲論文、35ページ。
21　梅澤知之・栗林澄夫・林正則・広瀬千一・山本惇二・渡邉哲雄編　『仮面と遊戯 ― フリードリヒ・シラーの世界』　鳥影社　2001（平成13）年。
22　中村元保「『ヴァレンシュタイン』三部作 ― トラウマをかかえたカリスマの悲劇」 梅澤・栗林・林・広瀬・山本・渡邉編　前掲書　109-127ページ。
23　詳細は注５を参照のこと。なお、「オイフォーリオンの会」は、2021（令和３）年９月現在、中川一成、長谷川健一が世話人、深見茂、広瀬千一、筆者がサポート役として、運営されている。会員は約25人である。
24　ダグマル・グレンツ『少女文学 ― 18世紀の道徳的・教訓的読み物から19世紀における「小娘文学」の成立まで』　中村元保・渡邊洋子共訳　同学社 2004（平成16）年。
25　ジークリット・ダム『フリードリヒ・シラーの生涯』中村元保・渡邊洋子共訳　同学社　2009（平成21）年。
26　Vgl. Norbert Oellers：*Schiller. Elend der Geschichte, Glanz der Kunst.* Stuttgart: Reclam 2006.

別表
中村元保氏の経歴と業績
［経歴］
1935（昭和10）年４月25日　大阪府に生まれる
1958（昭和33）年３月　大阪大学文学部文学科卒業
1958（昭和33）年４月　大阪大学大学院文学研究科独文学専攻修士課程入学
1960（昭和35）年３月　同上修了（文学修士）
1960（昭和35）年４月　大阪大学大学院文学研究科独文学専攻博士課程進学
1960（昭和35）年５月　同上退学
1960（昭和35）年５月　名古屋大学文学部助手
1963（昭和38）年10月　大阪大学教養部講師
1968（昭和43）年４月　大阪大学教養部助教授
1968（昭和43）年４月　DAAD奨学生としてドイツ連邦共和国マインツ大学出

張（翌年 3 月まで）
1974（昭和49）年 4 月　大阪大学言語文化部助教授
1976（昭和51）年 4 月　大阪大学文学部助教授　同大学院文学研究科独文学専攻担当
1989（平成元）年 4 月　文学博士（大阪大学）
1989（平成元）年 4 月　大阪大学文学部教授
1993（平成 5 ）年 6 月　大阪大学評議員（1995（平成7）年 5 月まで）
1995（平成 7 ）年 8 月　大阪大学文学部長・同大学院文学研究科長（1997（平成 9 ）年 3 月まで）
1999（平成11）年 3 月　大阪大学定年退職
1999（平成11）年 4 月　梅花女子大学教授（2008（平成20）年 3 月まで）
2001（平成13）年 4 月　梅花女子大学学長（2008（平成20）年 3 月まで）
2008（平成20）年 3 月　梅花女子大学退職

［業績］

著書

1)『ドイツ市民劇研究』（共編著）　三修社 1986（昭和61）年
2)『ドイツ市民悲劇成立の研究』朝日出版社 1991（平成3）年

論文

1)「シラーの『群盗』におけるRäuberモチーフとRächerモチーフ」『名古屋大学文学部研究論集』第25巻（文学篇）1961（昭和36）年
2)「シラーの『ドン・カルロス』──ドイツ啓蒙主義者の悲劇」『名古屋大学文学部研究論集』第31巻（文学篇）1963（昭和38）年
3)「情感的人間シラーの〈情感性〉」『Quelle』第14号　1964（昭和39）年
4)「シラーの悲劇におけるネメシス」『大阪大学教養部研究集録』第14号　1966（昭和41）年
5)「シラーのビュルガー批評」『内山貞三郎教授古希記念ドイツ文学論集』1966（昭和41）年
6)「ゲルト・カイザーの『お別れ舞踏会』」クヴェレ会編『現代ドイツ文学研究』1966（昭和41）年
7)「『たくらみと恋』における心理的表現」『大阪大学教養部研究集録』第16号 1968（昭和43）年
8)「ハーゼンクレーヴァー『息子』」クヴェレ会編『現代ドイツ戯曲論集』

1971（昭和46）年
9)「シラーの『フィエスコ』における三つの結末について」『田中健二教授還暦記念ドイツ文学論集』1971（昭和46）年
10)「シラー『ドン・カルロス』（B.v.ヴィーゼ）」片山良展・三木正之・八木浩編『文学の基礎理論』ミネルヴァ書房　1974（昭和49）年
11)「初期シラーの抒情詩における死と愛」阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』第17号1975（昭和50）年
12)「レンツ『ツェルビーン、もしく当世の哲学』」深見茂・山戸照靖・位野木紘一・平田達治編『ドイツ短編小説の系譜』クヴェレ会 1977（昭和52）年
13)「ハインリヒ・レーオポルト・ヴァーグナーの『嬰児殺しの女』――シュトゥルム・ウント・ドラング期の市民悲劇」阪神ドイツ文学会編『ドイツ文学論攷』第20号　1982（昭和57）年
14)「ドイツ市民劇における都市像」『近世都市の比較史的研究（大阪大学文学部共同研究論集第 1 輯）』1982（昭和57）年
15)「初期ドイツ国民劇場と都市」『都市史をめぐる諸問題』（大阪大学文学部共同研究論集第 2 輯）1984（昭和59）年
16)「最近の10年間におけるシラー研究」日本独文学会編『ドイツ文学』第73号1984（昭和59）年
17)「Fr.M.クリンガーの『シュトゥルム・ウント・ドラング』」大阪大学「独文学報」刊行会編『独文学報』第 1 号　1985（昭和60）年
18）„Schillerforschung in Japan nach dem zweiten Weltkrieg“, *Protokol* (Goethe-Institut Osaka), 1987.
19)「ゲラートの『優しい姉妹』における感情の世界」大阪大学文学部編『待兼山論叢』第42号　1990（平成 2 ）年
20)「多様性の時代――18世紀」　深見茂編　『ドイツ文学を学ぶ人のために』世界思想社 1991（平成 3 ）年
21)„Das Kindermörderin-Motiv und die bürgerliche Moral bei Goethe und Wagner“日本ゲーテ協会編　『ゲーテ年鑑』第35巻　1993（平成 5 ）年
22)「ゲーテとシラー」　日本ゲーテ協会編　『ゲーテ年鑑』第37巻　1995（平成 7 ）年
23)「シュトゥルム・ウント・ドラング期の市民劇における市民批評」　大阪大学ドイツ文学会編　『独文学報』第11号　1995（平成 7 ）年
24)「近代市民劇とその理論」　森谷宇一・山縣熙編　『文芸・演劇の諸相』　勁草書房　1997（平成 9 ）年

25）「『ヴァレンシュタイン』三部作──トラウマをかかえたカリスマの悲劇」梅澤知之・栗林澄夫・林正則・広瀬千一・山本惇二・渡邉哲雄編『仮面と遊戯──フリードリヒ・シラーの世界』鳥影社　2001（平成13）年

翻訳

1）ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー『言語起源論』（共訳）法政大学出版局　1972（昭和47）年
2）ヴィクトール・クレムペラー『第三帝国の言語〈LTI〉』（共訳）法政大学出版局　1974（昭和49）年
3）ノルベルト・エリアス『文明化の過程（上・下)』（共訳）法政大学出版局　1977（昭和52）年
4）ダグマル・グレンツ『少女文学──18世紀の道徳的・教訓的読物から19世紀における「小娘文学」の成立まで』（共訳）同学社　2004（平成16）年
5）ジークリット・ダム『フリードリッヒ・シラーの生涯』（共訳）同学社　2009（平成21）年

経歴と業績は、大阪大学ドイツ文学会編『独文学報』第11号（中村元保教授還暦記念）1995（平成７）年　345-348ページ　を基にして作成した。なお梅花女子大学関連は、同大学総務部の協力による。ここに謝意を表したい。

Zur Forschungsmethode des japanischen Germanisten Motoyasu Nakamura

Tomoyuki UMEZAWA

In diesem Text erläutert der Verfasser die Forschungsmethode des japanischen Germanisten Motoyasu Nakamura, der am 29. Juni 2019 verstorben ist.

Das Zentrum von Nakamuras wissenschaftlicher Leistung besteht aus einem Buch, einer Mitarbeit, 25 Aufsätzen, die Schiller, Stürmer und Dränger und moderne Autoren behandelt, und dazu 5 Mitübersetzungen.

Seine Forschungsmethode kann wie folgt zusammengefasst werden:

1) deutsche Texte genau, sorgfältig und gründlich lesen,
2) einschlägige Literatur umfangreich suchen,
3) den historischen und sozialen Kontext untersuchen und einbeziehen.

Schillers Frühwerk hat er mit gutem Leseverständnis werkimmanent interpretiert. Aber er hat den vergeblichen Versuch gemacht, jenes Spätwerk, besonders *Wallenstein* auch in der Sozialgeschichte zu interpretieren.

Nakamura zeichnet sich besonders als Wissenschaftler in Mitarbeit- und Herausgebertätigkeiten aus, die von der Kooperation mit anderen tüchtigen Germanisten zum Themenbereich „bürgerliches Trauerspiel“ gepflegt und gefördert worden sind.

Zu seinen hervorragenden Mitübersetzungen haben selbstverständlich ausgezeichnete Kenntnisse sowohl der deutschen Sprache als auch der japanischen beigetragen.

Am Ende hat sich der alte kränkliche Germanist auf Schillers Worte gestützt: „Ich habe mich mit ganzem Ernst endlich an meine Arbeit angeklammert“.